

「紋切り型」で、いいじゃない。 暮らしの中で文様を楽しむ文化

造形作家 下中 菜穂

はじめに

これほどまで「家庭」という言葉の内実が激しく変化する中で、「家庭科」で何をどう扱うのかということに、現場の先生方は日々頭を悩ませていることと思う。これからご紹介するのは「紋切り」という切り紙。江戸時代に始まり、昭和の初め頃までは図工の教科書にも載っていたが、数年前まではすっかり忘れられた存在だった。

そんな古臭いことを、今さらいったい何の役に立つのか？ という疑問を持たれる方がいるのも当然だろう。しかし、この15年余、本の出版、ワークショップ、展示などさまざまな実践を重ねる中で、「紋切り」は、今だからこそ、かえって新鮮なものとして受け止めることができる、私たち自身の「生活」や「創造性」について改めて考え、学ぶための格好の教材だという確信を深めている。

まずは、私がどのように「紋切り」と出会い、何故これは今の世に復活させたいと思ったのか。そこから書き起こしてみたい。

「紋切り型」って？

私がこの切り紙のことを知ったのは、明治時代の「世界遊戯法大全」という本の復刻版だ。そこにはたくさんの好奇心溢れた江戸の遊び、目新しい西洋の遊びが紹介されている。この本には難しい数学の問題や言葉遊びなども取り上げられており、それも

かつては「遊び」の範疇であったことにも驚きを禁じえない。そんな中に見つけた不思議な図（図①）、これが「紋切り型」だとある。えっ？「紋切り型」って…。そう、「型通りでつまらないもの」ステレオタイプという意味で使われている言葉だ。何気なく使っていたこの言葉、そもそもはこの型紙のことだったのだ！ なるほど。それを試しにやってみたのが始まりだった。

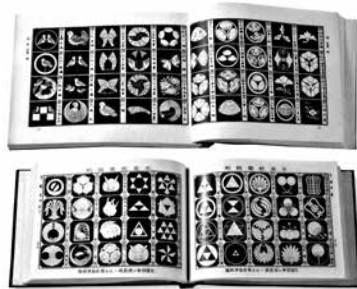
手の中に舞い降りる日本の「かたち」

手順は簡単、紙を折りたたみ（1～5つ折りの5通りがある）、型紙（紋切り型）の通りに切り抜く。そっと開けば、手の中には美しい日本の伝統の「かたち」が舞い降りる。これらはみな「家紋」だという。「家紋」それ自体が馴染みが薄い。その上、「家紋」で遊ぶということも驚きだった。調べてみると「紋帖」（図②）という書物の存在を知る。これがまた驚きの書物だった。今でも職人が家紋を描くために使う「見本帳」だ。そこに並んでいるのは「家紋」の数々…植物、動物、天体や暮らしの道具、霞や州浜など形のあるようでないものまで、まるで博物図鑑のようだ。調べてみるとそのひとつひとつに、意味や物語がたくさん詰まっている。そこからは、ご先祖様たちの自然観や美学、哲学が見えてくる。古臭く堅苦しいとばかり思っていた「家紋」が、こんなにユーモラスで、美しく、不思議でいっぱいだったなんて！ すっかり魅せられてしまった。

図① 『世界遊戯法大全』 松浦政泰編（1879・明治12年）



図② 『図解いろは引 標準紋帖』（京都書院）



謎は解けるまでが面白い

ささやかな切り紙の文化は、一旦失われてしまうと容易にはその全貌がわからない。しかし、すぐにわからないことが、かえて良かったのかもしれない。調べる過程で、さまざまな出会いがあり、かつてあった（今はない）生活文化や教育にも思いを巡らせることとなった。

神田の古書店は170年も前の書物を探し出してくれた（図③）。これによって、もとは遊びではなく職人が紋を描くための技術だったということがわかった。紋を美しく描くためのコンパスや定規を使う難しい作業。それがこの方法だと容易にできる。「秘伝」だとあるので、この頃始められたものとみてよいだろう。

図③ 『諸職必要 紋切型』 漢齋英泉編（1848年）



同時に明らかに遊びとして「紋切り型」を掲載した本も見つかった。寺子屋の教科書にも載っていた。そこには仕事と遊び、勉強という垣根を作らず、面白いことは面白い。何でも楽しんだ好奇心の旺盛な先祖様たちの姿が見えてくる。

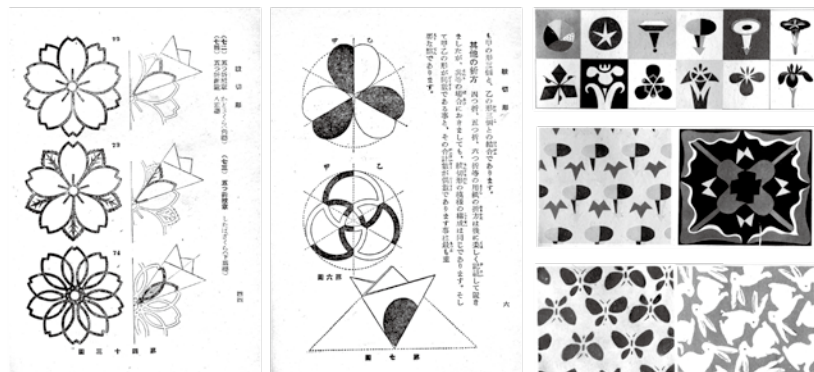
明治～昭和の古い図工の教科書を探してみた。あるある。「紋切り」だけでなく、文様を教え工夫するカリキュラムが、かつてはたくさんあったのだ（図④）。「お手本」の通り描いたり、型を使って学ぶ教育が「自由に」描く、オリジナリティー重視のものへと転換していく。それは画期的なことではあったが、軌を同じくして文様の文化が教育からも暮らしからも消えていったのは残念なことだ。

「紋切り型」でいいじゃない

現代社会は暗黙のうちに、人と違う何かを持っていることを過剰に求める。私が講師をしていた美術大学でも、多くの学生たちが、「個性」を出さなければならないというプレッシャーに悩む姿を見てきた。「自由に」と言いながらも、結局は同じような絵や作品になってしまう。この情報社会の中で、「人と違わなくてははいけない」と思い込むと、「誰もやっていない」ことなど何もないような気がしてくる。そうして物を作る気力を喪失していく。私たちは幼い頃から、他人との比較を意識させられ続ける。そんな社会や教育の中で、素朴な喜びや自分自身を見失ってはいまいか。

翻って、この「紋切り」では文字どおり、型があるので悩まない。一般の人とのワークショップでも、初めは「私はセンスがない」と尻込みしていた人が、「型通り」に切ることで生み出される「かたち」の美しさに導かれるように夢中になる（図⑤）。そして、多くの人々がごく自然に「型破り」を始めるのだ。そして、「私って、デザイナーみたい」と満足げに呟く。同じ型を使っても、出来上がった作品はどれひとつとして同じではなく、それでいて、並べてみると美しい調和を生む（図⑥）。そうか、そうだったのか！

図④ 『図画手工教本 巻4』、『キリガミ』（本多巧著 販売元・発行年不明）より



図⑤ ワークショップで作った雪の結晶と桜の家紋。季節の繊細な移ろいを捉えたかたち。そこからは日本人の感性が見える。



ものづくりの助走の装置としての「型」の役割に気づかされた。これこそ「型の文化」の底力。型があるからこそ、型破りができる。型があるからこそその自由というものがあったのだ。

個性を出そう出そうと肩肘張らなくてもいい。夢中になった時間の先にこそ、「個性」はほんのりと浮かび上がる。そう、「紋切り型」でいいじゃない！すぐれた「型」を残してくれた先人に感謝。これを使わないなんてもったいない。ものづくりの喜びは人を元気にする。

過去と今、そして未来がつながる

「家紋」は家のしるしであるだけでなく、その小さな形の中に、デザインのアイデアをたくさん秘めている。組み合わせ、新しい解釈を加え、工夫することで、意味を作り出し、新しいかたちを作りだしてきた。いわばひとつひとつが「かたち」の単語。先人たちは、それらを身につけ血や肉とすることで、文章を書くように着物の柄や工芸品のデザイン、絵画など豊かな文様を生み出してきたといえるかもしれない。かつてはこんなに豊かな「かたち」の文化があった。私たちはそれを受け取り損ねていたのだ。

「紋切り」の折り畳んだ紙を開く瞬間のドキドキ、ワクワク。何度やってもそれは色褪せない。それはきっと江戸時代のご先祖様も同じだったろう。そういう共感を持つことで、遠い歴史の彼方だった昔が、ぐっと身近に引き寄せられる。

先人に教えを受けたり、先祖から何かを受け継い

図⑥ ワークショップで作った紋をハガキに貼って、それぞれのデザインを楽しむ。同じ型から生まれた個性。そして調和。



だりということを実感する機会がほとんど無いのが現代社会である。私たちはしがらみから自由になった一方で、「個」が、とりとめもない空間にポツンと浮かんでいるような寂しさや不安を内面に抱え込むことにもなった。

今また私たちが「紋切り」を通して、一旦は忘れていた暮らしの中で育まれてきた「かたち」の文化を改めて身につけることの意味、それは、自分が脈々と受け継がれてきた大きな時の流れの中にあるのだということを実感することでもある。

誰でもが「伝える人」になり得る、つながりを回復できるということは大きな意味のあることだ。私自身、「紋切り」や文様を心から誇りに思い、それを「伝える人」となることで、なんとも言えない喜びと安心を感じるようになった。自分たちの手でこの文化を復活し、もしかしたら、それが百年後にも手渡せるかもしれない。それは大きな希望だ。

暮らしの中に手仕事があった

再び「家庭」の問題に戻ろう。今、家庭の中でどれほどの手仕事があるだろうか？ 服は買っては捨てるものとなり、裁縫は必要に迫られる技術ではなくなった。料理はどうだろう？ これも、便利な出来合いが次々に売られて、コンビニだけで暮らしていけなくもないのかもしれない。この「便利」というのが曲者。よほど意識して抵抗しないと「何もしない」で済ますことが人生の目的？ ということにもなりかねない。「便利」という言葉の甘い囁きにひたすら身を委ねてばかりいたら、大変なことになる…そんな危機感すら感じる。最近「不便益」なる言葉を使って、別の価値観を模索する学会も現れた。そんな今を考えるためには、かつてあった暮らし

しの中の手仕事について調べたり、実際にやってみることも一つの方法だ。私たちが、不便だから、面倒だからと捨ててきたものの中に、美しいものを自分の手で生み出す喜び、人間らしい豊かな時間があったことに気がつくかもしれない。

私たちの暮らしに活かす

明治時代、日本にやってきた多くの外国人が、「日本には庶民の暮らしの中にアートがある」と驚いたという。和服のおしゃれは文様使いの技を磨くことでもあった。着物と帯や半襟、小物に至るまで文様が施され、それを組み合わせることを楽しみながらその技を身につけた。

今、私達の暮らしの中にはほとんどそのような機会がない。では、どうする？ 切り紙なら気軽にできて、私たちなりの楽しみ方を編み出せるかもしれない。切ったものを自在に並べ替えることができるので、気楽にデザインの練習として楽しめる。まずはやってみることだ。紙を布に置き換えて使ってみるのもいい（図⑦）。

「紋切り」に触発されて、もっともっと多くの工夫が生まれてくるに違いない。そのようにして次に手渡していく、長いパトンの連なりを、私たちの時代で途切れさせることなく繋いでいくこと。これは夢ではないと思っている。

図⑦ 布を使えば、このようなバックも。州浜、三つ唐かんなどの紋もモダンなデザインに。本は「切り紙もんきりあそび」（下中葉穂著 宝島社刊）より



◆資料編

ここまで「紋切り」を取り上げる意義について書いてきたが、授業で扱うためのとっかかりになる具体的な情報にも少し触れておこう。とてもここでは書ききれないが、豊かな可能性を秘めているので、ぜひ先生方自身でその深い森に分け入ってほしい。誰にでもできる簡単で楽しい手仕事から出発して、さまざまな方向へと発展できることと思う。

家紋の歴史

平安時代に貴族たちが、外から見ただけでは誰が乗っているか判別のつかない牛車を見分けるために、文様を決めたことが「家紋」のはじまりだと言われている。その後、武士が戦場で敵味方を見分けるための旗じるしとして使い、数を増やしていく。

江戸時代になると、庶民の生活でも「家紋」を知り、見分ける必要もあり、武士の家紋や槍じるしなどを紹介する「武鑑」がベストセラーとなる。武士と関わるものを作る職人や商人も多かった。役者や遊女も家紋を使い、庶民もそれをまねて使うようになる。と言っても公に許可されたわけではなく、正式に庶民が家紋を持つようになったのは明治になってから。苗字と一緒に家紋を持った。庶民にいたるまで家紋を持つ国は世界的にも珍しい。

しかし、明治政府は家制度で庶民をも管理することを意図したため、かえって家紋が堅苦しいものとなってしまったという面もある。江戸時代中期から末期の文様文化はもっと明るく、お洒落で諧謔に満ち、自由なものだったと思われる。そんな時代を想像するのは楽しい。

家紋と文様

研究者によれば、家紋は2万種類以上あるという。家紋のカタログとも言える「紋帖」は、職人が紋を描くための見本帖として、多くの本が出版され続けてきた（図②）。似たように見えても、時代を映し、さまざまな特徴や違いがある。たいがいはさまざまな紋が、平安時代からあるものも、江戸になってから工夫されたものも、解説なしで「いろは」順に肩を並べている。それはまるで生き物が進化するように、工夫されて増え、淘汰され、生き残ったものたちだ。

その来歴や意味を調べていくとさまざまな物語がそのひとつひとつにあることがわかる。それ自体を課題とするのも面白いかもしれない。謎のまま解ら

ない事ことも多いが、知りえた事から想像力は無限に広がる。

これらの「かたち」は「家紋」であるだけでなく、デザインモチーフの最小限のピースであり、これらを組み合わせる事で文様文化が豊かになってきたのだということもわかる。美しい文様を文章に例えるなら、家紋は単語だと言えるかもしれない。「紋帖」は、ひとつのモチーフをどのように展開して変形していくかというアイデアが満載で、デザインの教科書とも言える。

また、どの紋にも名前があり、それに「並び」「ねじり」「向かい」「三つ」などの言葉を付け加えることで、「かたち」を言葉で伝えることができる。これも写真がなかった時代の豊かな文化のひとつだろう (図⑧)。

暮らしの中の「切り紙」

図⑧ 『紋切り型 天の巻』
(下中葉穂著 エクスプランテ刊)



江戸時代以来「切り紙」は実際にどのように使われてきたのか。暮らしの中の紙の仕事は失われやすく、わからない点が多いが、風俗画や今も地方に残る風習などの調査からわかってきたことを幾つか挙げておく。何枚か重ねれば、同じものが何枚も作れることは、コピー機がない時代にかたちを複製する技術としても優れていたと思われる。フィールドワークを行った中国の農村では、厳しい自然の中での暮らしを彩る手仕事として、なくてはならない存在であることを実感した。

- ・障子などの補強部分に透し模様のように貼る。穴の補強にも。
- ・正月や祭り、神楽などの行事の装飾。
- ・刺繍などの型紙として使う。
- ・行灯などに貼る。
- ・染色の型紙として。
- ・宗教的な意味合いのある切り紙も。

◆実践編

「紋切り」をする

ここでは、「初雪」(3つ折り)と「持ち合い四つ七宝」(4つ折り)2種類を写真で紹介する。

図⑨ 型紙「初雪」『いろはにもんきりあそび』
(下中葉穂著 エクスプランテ刊)より



図⑩ 型紙「持ち合い四つ七宝」
『いろはにもんきりあそび』
(下中葉穂著 エクスプランテ刊)



※この稿で、多くの型を紹介するのは限界があります。詳しくは筆者の著書をご覧ください。なお、これらの「紋切り型」(型紙)は著者が現代人にやり易いように工夫したもので、著者が著作権を持っています。授業で使うのは構いませんが、それ以外の使い方をする場合は下記サイトからご相談ください。またさまざまなワークショップの案内や報告、使い方アイデアなどお知らせしています。

■エクスプランテ <http://www.xpl.jp/>

「紋切り」でつくる

単に切り紙として「紋切り」を楽しむだけではなく、それを使って自分の暮らしを彩りたい。伝統のかたちを作るだけでなく、それを現代的なセンスで使ってみることで、「型」の力を実感できる。自分なりの工夫を加えて使ってこそ、文様が息を吹き返す。何千年もの間そのようにして受け渡されてきたのだから (図⑪)。

図⑪ コースターに貼る。『切り紙もんきりあそび』
(下中葉穂著 宝島社刊) より



調べる フィールドワークする

本稿は高校の家庭科の先生向けということだが、「紋切り」「文様」はあくまでも生徒の興味を引く最初の入り口で、そこから広がる興味は多方面に広がる。

例えば、数学の幾何学の問題へ、あるいは歴史へ。もともと「家庭」の中で必要に応じて育まれた知恵や知識にはカテゴリー分けがあるわけではなく、さまざまなジャンルを総合する力が必要だ。

文様のことに興味を持ち始めると、世の中のさまざまな場面、場所に「文様」が見えてくる。あそこにも、ここにも…と見えてきたものを収集して発表しあうのもいい (筆者はこれを「文様採集」と名付けている)。ほとんどの人がカメラ付き携帯電話を持っている現代だからこそできる方法だろう。

筆者も「紋切り」のみならず、日本の伝統的な切り紙、東北地方の「きりこ」、三河地方の神楽の切り紙、高野山の「宝来」、新潟や山形の正月の切り紙、中国陝西省の「窓花」など、実際に暮らしの中で「切り紙」の文化が生きている姿を求めてフィールドワークを続けている。わざわざ遠くに行かなくても、

地域文化の調査や聞き取り、郷土の文化の見直しなどにもつなげることができるかもしれない。そこから、家族や家庭の在り方の今を考えるのも面白いだろう。ぜひ、みなさんの実践報告もお知らせいただければ嬉しい。

◆参考書籍

・『シリーズかたち・紋切り型』

「いろはにもんきりあそび」「花之巻」「風之巻」「月之巻」「雪之巻」「昭和モダン」「らくらく之巻」「めでたづくし」「ものづくし」「文様切り型」「天の巻」「地の巻」「渦巻ぐるり」「切り紙そばちょこ」「紙遊び歳時記 祝う」「紙遊び歳時記 咲く」「紙遊び歳時記 日本の行事」「紙遊び歳時記 お守りもんきり」「背守り練習帖」「中国のめでたいかたち」「日本のめでたいかたち」シリーズことば「雲」「月」「窓花 中国の切り紙」「キリガミ たてもの文様帖 東京都庭園美術館の巻」など (以上エクスプランテ刊)。

・「切り紙もんきりあそび」「切り紙もんきりあそび『かたち』を贈る」(宝島社)

・「こども文様ずかん」(平凡社)

・「切り紙キリヌキ紋切り遊び」(河出書房新社)

など

◆プロフィール

造形作家、もんきり研究家、出版業

江戸時代の切り紙「紋切りあそび」を通して「かたち」に込められた祖先の暮らしや文化、自然観などを紹介。国内外で切り紙の文化をフィールドワーク。文様を暮らしの中で使い楽しむ生活文化を現代によみがえらせるべく活動中。

本の出版、国内外でワークショップや展覧会を開催。東北地方の「きりこ」三河地方の神楽の切り紙、中国の「窓花」など『暮らしと切り紙』をめぐるフィールドワークを続ける。福岡アジア美術館 世田谷生活工房で「窓花 中国の切り紙 暮らしのフィールドワーク展」を企画開催。街や建物、暮らしの中に潜む文様を採集して、キリガミにする「たてもの文様帖」のプロジェクトを開始。

映像の百科事典「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」の活用チームとして、アーカイブ映像の実験的な上映会やワークショップを展開。どちらの活動でも、観て、聞いて、感じて、やってみる。手や身体を通して「過去からの贈り物」を受け取り、手渡して行くことがモットー。